

百田夏菜子とラジオドラマのせかい

第四十一話「母の秘密」

出演 妹 … 百田夏菜子

姉 … あなた

作 … 清水サトル

演出 … 小鍛冶優子



姉 「ねえ」

妹 「うん？」

姉 「玄関の傘立てだけど」

妹 「傘立て？」

姉 「見慣れない男物の傘があるんだけど。夏菜子の？」

妹 「男物？ 違う」

姉 「じゃ、お母さん（かな）？」

妹（ナレ）

姉にそう言われて見てみると、玄関に置かれた傘立てに…

見慣れない「男物の紺色の傘」が、ささっていた。

家（うち）は、両親が子供の頃に離婚したので、

母と姉と私、女3人の家族。男性物の傘を使う人はいない。

妹 「お姉ちゃんじゃないんだよね？」

姉 「もちろん、違うよ」

妹 「だったら、お母さんしかあり得なくない？」

姉 「そうだよね」

妹 「お母さんが誰かに借りたんじゃないの？」

姉 「誰に？」

妹 「会社の誰かとか（？）」

姉 「でもさ。夏菜子は会社で誰かに傘なんて借りたりする？」

妹 「借りないか」

姉 「私は人からなんて借りない。大体、借りる場面なんてある？」

妹 「確かに。そんなないね」

姉 「と、なると。（*間があって）まさか……」

妹 「え？」

（ *ミステリー風の B G が忍びこむ ）

姉 「お母さんに…男の人が…」

妹 「できたっていうの？」

姉 「ないとは言えないでしょ」

妹 「ないでしょ」

姉 「どうして言い切れるの？」

妹 「それは…。でも、例えばさ。そういう人がいたとして。

その人の傘がなんでウチにあるの？」

姉 「お母さんのパートって早番だと3時には終わるでしょ」

妹 「うん」

姉 「私たちが帰って来るまでの間に

ウチでお茶でも なんてこと あるかもじゃん」

妹 「なるほど」

姉 「たとえばさ、ウチに来た時には雨が降っていたけど、

帰る時にはその雨も上がって…」

妹 「傘を忘れて帰った」

姉 「そう」

妹 「でもあの傘、いつからあそこにあるんだろ」

姉 「気づいたのは今日だけど」

妹 「待って。おとといの朝はなかった。

私が出るとき、玄関出たらポツポツ雨が降ってきたから

傘を取りに戻って、その時、傘立てから自分の傘を探したけど」

姉 「その時にはなかった？」

妹 「なかった」

姉 「(*思い出す) あ」

妹 「なに？」

姉 「おとといだよね？ あの日って、確か朝から雨が降り出しと

その後 午後4時には止んで太陽が出てた。

私、本社から神田の営業所に行ったのがその時間だったから

妹 「てことは。むしろ、おととい午後からの線が濃厚？」

姉 「普段、玄関の傘立て使わないから気づかなかった」

妹 「私も。いつもは折り畳み傘だから」

姉 「どうする？」

妹 「どうするって？」

姉 「もし、再婚って話になったらどうする？」

妹 「私は、お母さんが良いならそれで良いけど」

姉 「私はちょっと」

妹 「え？ 反対なの？」

姉 「反対っていうか。もうこれ以上、苦勞して欲しくないから。」

冷静に相手をよく知って、見極めてからじゃないと

妹 「すぐに賛成はできないってことか」

姉 「そうだね」

妹 「そっか」

姉 「たぶん最後はお母さんに賛成する事になると思うけど」

妹 「そうになったら、ここで同居になるのかな？」

姉 「お母さん。おばあちゃんの家も近いし」

ここは離れたくないっていつも言ってるからね

妹 「なんか、これからイロイロありそうだね。ねえ。ちょっと傘か？」

姉 「広げてどうすんの？」

妹 「相手がどんな人なのか、手がかりがあるかも知れない。私ちよっと見てくる」

SE (*ドアの開く音/ドア)

姉 「(*玄関に向かって) ねえ。どんな手がかり？」

小学生じゃないんだから、名前なんて書かないでしょ」

妹 「(*玄関から聞こえる) あっ！」

(*ミステリー風の BG が消えて)

SE (*玄関に駆けつける音/ドタドタ)

姉 「どうしたの? (*気づいて) え、傘になんか書いてある」

妹 「(*読む) 長谷川総合電気設備 総務所有」

姉 「それって… 確か。お母さんのパート先。てことは」

妹 「会社の傘じゃん！」

SE (*ハッピーチャイム)

END